

三木先生のご退官にあたり

なんとなく、いつまでも壮年でいらっしゃるように思っていた三木先生が停年でご退官になるとは、信じられないような寂しい気持ちである。先生の中世文学のご造詣には専門外で不勉強な身には理解もおよばないながら、折にふれて先生のお身のまわりから輝き出る中世文学の香りに、ひそかなときめきを禁じえなかった。その先生が大学を去られることは言語文化専攻時代の思い出から香気が失せていくような思いである。

今となってはもう十年の昔になってしまったが、お茶の水の大学院人文科学研究科に日本語言語文化専攻が設立されたとき、先生にご専門を離れて移ってきていただいたことのありがたさは生涯忘れることができない。この十年の間に日本語教育の学術的地位のようなものがかなりあがってきたが、十年まえにはまだまだ学問の分野として認識されていたとはいえない状況にあった。当時、国文学の専門家として名の知れた学者が日本語教育専攻の分野に身を移すということは、現在、大学院で日本語教育を専攻する人たちにとっては想像もつかないような破天荒なことであった。いわば京の都のお公家さんがあずまの片田舎に落ちていくようなものであったろうと思われる。先生は快くこの都落ちをお引き受けくださって、根気よく、温容をくずすことなく、かまびすしいあずま女たちのさえずりに耳を傾けてくださった。

おかげで日本言語文化専攻からは優秀な修了生が次々と世に出て、これからの国際化時代を担う戦力として活躍している。わたし自身も、お茶の水女子大での実績の余波で、現在も脳力と体力の減退を繕いながら仕事を続けることが可能になっている。三木先生が大学を去られるにあたり、あらためて日本語文化専攻の成立を支えてくださった御礼を申し上げ、これからのご健康といっそうのご活躍を祈りたい。

2001年 6月

水谷 信子